

## トランシルヴァニアにおけるルーマニア人意識について

### －第1次大戦前の文化団体 ASTRA の活動を通して－

2111034C 梅田小桃未

**要約** 第1次世界大戦の戦後処理により、トランシルヴァニアは国民国家ルーマニアの一部となった。それまでハプスブルク帝国およびオーストリア＝ハンガリー二重帝国の支配下にあったトランシルヴァニアは、民族的同胞が建国したルーマニア公国（旧公国）との統一を全面的に歓迎したわけではなく、むしろ旧公国を軽視していた。その背景には、ハプスブルク帝国を祖国と捉え、帝国に忠誠を向けていたトランシルヴァニアのルーマニア人の姿があった。このような大戦間期の複雑なルーマニア人意識は、大戦前の帝政期に醸成されたと考え、本論文では、帝政期にトランシルヴァニアで設立されたルーマニア人文化団体（ASTRA）の活動に注目することで、トランシルヴァニアにおけるルーマニア人意識の複雑性を明らかにできると考えた。

ASTRA は、ルーマニア人のラテン的出自にこだわった研究を行い、様々な分野の活動をトランシルヴァニアに限定して行った。このことは、同地域のルーマニア人に独自のアイデンティティをもたらすと同時に、彼らの考える「私たちのルーマニア」の範囲がトランシルヴァニアに限定されていたことを示した。ASTRA は帝国の秩序の中でルーマニア人の地位向上を目指した。そのため、帝国外のルーマニア人と共通の民族意識を持つ必要も協力して活動を行う必要もなかった。一方、旧公国のルーマニア人は、文化的、宗教的なつながりを東方に持ちつつ、トランシルヴァニアとは異なる民族像を抱き、ロシア帝国やオスマン帝国からの政治的独立を目指していた。本論文を通して明らかになった、民族的境界線内での地域による民族意識のずれや政治目標の不一致といった現象は、東欧の諸地域で散見される。今後は大戦間期の ASTRA の活動および諸民族の動向について研究を深め、東欧の民族意識の解明に貢献したい。

キーワード：ルーマニア人意識、トランシルヴァニア、民族アイデンティティ

#### はじめに

現在のルーマニアを構成するワラキア、モルダビア、トランシルヴァニアの3つの地域は、それぞれ異なる歴史を持つ。特に、一国の少数民族でありながら、民族的には母国といえる国と隣接していたトランシルヴァニアのルーマニア人の歴史は、彼

らに複雑な意識をもたらした。第1次世界大戦では、トランシルヴァニアのルーマニア人は旧公国を「敵」と表現し、軽蔑の念を示しつつ、帝国への忠誠心を明確にした。戦後、旧公国に吸収される際、トランシルヴァニアのルーマニア人は同地域の自治を統合の条件としたが、それが認められ

ることはなく、旧公国出身者が優位に進める政治に不満を持っていた。

上記のような、大戦間期における複雑なアイデンティティは、帝政期に醸成されたと考え、本論文では、1861年にトランシルヴァニアで設立された、ルーマニア文学とルーマニア人の文化のためのトランシルヴァニア協会 (Asociațiunea Transilvană pentru Literatura Română și Cultura Poporului Român、通称 ASTRA) の活動を通して、当時のトランシルヴァニアにおけるルーマニア人意識がどのようなものであったかを明らかにする。ASTRAを扱う理由は、ハプスブルク帝国に初めて認められたルーマニア人文化団体であることから、ルーマニア人意識の特徴である「帝国への忠誠心」に深く迫ることができると考えたからである。

ルーマニアの民族意識の発生に関しては、先行研究により明らかになっている。18世紀末から、ギリシャ・カトリックの聖職者を中心にしたトランシルヴァニア学派と呼ばれる、ルーマニア語のラテン的由来を模索する学者らが登場した。1791年、民族の起源や中世からの歴史的経緯を基に作成したルーマニア人の法的地位の回復を目的とする嘆願書を、ウィーンの皇帝に提出したことを皮切りに、1805年には、サムイル・ミク・クラインらがローマ時代まで遡って史料編纂やルーマニア語研究を試み、『ルーマニア全史』を発表するなど、ルーマニアの歴史と固有の民族の存在を認識させる努力をしてきた。

帝政期中東欧における諸民族の意識は民族によって異なった。ハンガリーでは、18世紀に育った民族意識が19世紀初頭に

は政治運動を含む民族主義を形づくるまでになり、周辺諸民族への同化政策へと結びついた。セルビアでは、ハプスブルク帝国のカトリック勢力に対抗するために、後ろ盾としてロシア正教に接近した。クロアチアでは南スラブ人民族を統合しようとする民族意識が高まった。スロヴァキアでは周囲のスラブ民族とは異なる意識を確立することで独自性を高める改革が行われた。

上記の先行研究を引き継ぎ、第1次世界大戦前のトランシルヴァニアにおけるルーマニア人意識を明らかにする。

## 第1章 ルーマニア人意識の諸問題

ハプスブルク帝国とそれに臣従している諸民族の関係は、「ハプスブルクへの忠誠心と共通の利害関係にもとづいたもの」であった。しかし、18世紀頃まで、帝国のルーマニア人は憲法の法規上でさえ政治的な権利を認められていなかった。帝国の諸民族が民族意識に芽生え始める中、トランシルヴァニアのルーマニア人も帝国の他の民族と同じ民族的権利を求めたとされる。

トランシルヴァニアのルーマニア人の民族意識はハンガリー人の抑圧により高まりをみせる。1867年のオーストリア＝ハンガリー和協 (アウスグライヒ) により独立した政府機関を持ったハンガリーは、国内の非ハンガリー系諸民族に対し同化政策を進めた。例えば教育の面では、ハンガリー語による授業の義務化がなされた。

このような政策に対抗し、トランシルヴァニアのルーマニア人指導者らは、ハンガリーへの不満を書き連ねた覚え書を、ハンガリー国王としてではなく、オーストリア皇帝としてのフランツ・ヨーゼフに送るな

ど、二重帝国の政治体制や行政構造の変化によるトランシルヴァニアのルーマニア人の地位向上を目指した。

一方ワラキア、モルダビアの民族意識は、オスマン帝国とロシア帝国からの政治的独立を目指す過程で育ったとされる。フランスから流入した啓蒙思想は、同地域のルーマニア人のラテン的性格を語る文脈にも用いられるようになった。トランシルヴァニアのルーマニア人が、ドナウ二公国の東方勢力からの解放や三地域の統合といったことには関心を持たなかったのと同様に、旧公国の人々もハンガリー人を自分たちの敵と見なすことはなかった。

## 第2章 第1次世界大戦前（1861年～1914年）のASTRAの活動について

ASTRAは1861年に設立した。ルーマニア文学の振興とルーマニア民族の文化を多様な分野で育成することおよびそれらを通じて帝国の繁栄に貢献することを目的として掲げ、様々な分野の研究や著作物の作成、出版などを通して上記の目的を達成しようとした。ASTRAの特徴として、ハブスブルクへの忠誠と宗教を越えた連携が挙げられる。トランシルヴァニア帝国王立総督府宛ての書簡には、トランシルヴァニアのルーマニア人の発展がいかに帝国の繁栄に繋がるかということが述べられており、「人道的で文化的、立憲的な祖国」と評価した帝国の秩序の中で権利の獲得を目指していた。また、協会の会長には正教会の司教が、副会長にはギリシャ・カトリックの司祭が選出され、トランシルヴァニアのルーマニア人の間で広く信仰されていた二つの宗派が協力することで、宗派を超えたル

ーマニア人の協力が進められた。

ASTRAは様々な分野の専門性を高めるべく、文学、歴史、民族誌、社会科学、自然科学、医学、教育、経済、技術、工業、商業と宣伝活動、芸術の部門を設置し、それぞれの分野の研究、活動を進めた。また、トランシルヴァニアを地域ごとに分割して支部を配置することで、地方も含めた安定的な組織運営を図った。

ASTRAは様々な分野にわたり活動を行ったが、どの活動も共通して農民に向けた支援を重視していた。例えば教育の分野では、農村出身の若者へ奨学金を付与したほか、読み書きができないルーマニア人のために村ごとの専用のコースを設置した。また、各地に図書館や博物館を設立し、トランシルヴァニアの各地の民族衣装や踊り、農民による工芸作品を展示する博覧会を開いた。さらには、医療や農業といった生活に必要な分野の研究から得た知見を農民に伝達する講演会を行い、都市部より多くの集会を開いた。ASTRAは農民を「ルーマニアらしさを象徴するすべてを守ってくれた」対象とみなし、農村のルーマニア人の暮らしの向上に繋がる活動を展開した。

## 第3章 トランシルヴァニアにおけるルーマニア人意識について

ASTRAの活動を通してトランシルヴァニアにおけるルーマニア人意識を考察すると、同地域のルーマニア人が想像する「私たちのルーマニア」の範囲はトランシルヴァニアに限定されており、ASTRAが帝国に要求した権利の対象もトランシルヴァニアのルーマニア人のみだったという特徴があった。

意識の限定化に繋がった活動の中でも力を注いだ分野は言語である。「政治的に抑圧されることがあっても、ルーマニア語を守り抜けば民族は滅びない」と語る設立者の声もあるように、ASTRA は言語を重要視していた。具体的には、ラテン語の起源に基づく正字法の確立に尽力し、従来使用されていたスラブ語で用いられるキリル文字ではなく、ラテン文字でルーマニア語を表記することを統一した。そしてその正字法をトランシルヴァニア内で普及することに取り組んだ。これはトランシルヴァニアのルーマニア人アイデンティティに独自性をもたせるものであったといえる。

ASTRA の指導者が書いた詩からも意識の限定化を見て取れる。“*Seghedine, Seghedine Dumnezeu cum te mai ține? Mureș Tisa, până când Te mai rabdă pe pământ?*” に登場する風景は、トランシルヴァニアの西と東を流れるムレシュ川とティサ川が登場することから、アイデンティティの象徴と故郷の範囲がトランシルヴァニアであったことを想起させる。

加えて、教育事業や図書館の設置、講演会といった民衆に対して行う活動もトランシルヴァニアに限定されていた。歴史研究ではワラキアやモルダヴィアの名は登場したが、自分たちの出自はラテンであるという歴史認識を前提にした、トランシルヴァニアのルーマニア人に対するスラブ的影響を語る文脈で登場するのみで、他のスラブ諸民族と並列して描かれていた。これらのことから、ASTRA の活動は、トランシルヴァニアのルーマニア人の発展という軸で行われていたといえる。

さらに、上述した活動の成果を報告する

機関誌も、トランシルヴァニアで行われた活動を報道するため、必然的に内容が限定されていた。また、ASTRA が発行した「地名辞典」は、トランシルヴァニアの都市や村のみを解説したものであった。これらのことから、ASTRA の発行物が示す「ルーマニア」も限定されていたことが分かる。さらに、それらを手取るトランシルヴァニアのルーマニア人が想像する「ルーマニア」も同じく特定の地域（トランシルヴァニア）を指したと考えられる。

活動が限定されていた要因は、「ハプスブルクへの忠誠心」が関与していると考えられる。ASTRA は、帝国の秩序の中でトランシルヴァニアのルーマニア人の地位向上を目指し続けた。アウスグライヒ以降も、ハンガリーの抑圧体制を変えるためにオーストリアの介入を期待した。その過程では、旧公国は問題として認識されないし、そこにいるルーマニア人を検討の対象にする必要もなかった。

トランシルヴァニアの人々は、文化的、宗教的にはローマを向き、敵はハンガリーであり、政治的同盟者をオーストリアとみなしていた。一方旧公国のルーマニア人は、宗教や文化は東方のキリスト教と深いつながりを持ち、政治的にはロシアとオスマンの支配から脱却を目指していた。このことは、トランシルヴァニアの「ルーマニア」像が限定されていたのみならず、三地域におけるルーマニア人意識の範囲と性格が異なっていたことを示している。

#### おわりに

本論文では、文化団体 ASTRA を通してトランシルヴァニアのルーマニア人意識の

複雑性を紐解いた。本研究で分かったことは、民族的同胞が営む国家と祖国と呼べる国家が一致するとは一概にはいえず、民族的に近い者に帰属意識や忠誠心が生まれるとは限らないということである。トランシルヴァニアのルーマニア人はまさにハブスブルク帝国への忠誠心と旧公国への不信感、そして独自のアイデンティティを抱えていた。

民族の分布と同じ民族意識を持つ人々の分布が必ずしも一致するわけではない。こういった複雑なイデオロギーが滞在する事例は、中東欧諸国でよく見られるが、各々

で事情は異なる。先行研究で明らかになった諸民族の意識形成とトランシルヴァニアのそれを比較すると、スロヴァキアが宗派の違いを越えて意識を確立しようとしたことに類似性を見いだせるが、南スラブ民族の統一を目指したセルビアの事例とは異なるといえる。中東欧の諸民族が、個別の目的と方法で意識を確立しようとしたことで、それぞれ異なる複雑性を抱えたと推測できる。今後はトランシルヴァニアのルーマニア人意識の研究を深めるとともに、諸地域との比較を行うことで、東欧のナショナリズムの明確化に寄与すると考える。

### 主な参考文献

- ・ アンリ・ボグダン（高井道夫訳）『東欧の歴史』（中央公論社、1993年）
- ・ エドガー・ヘッシュ、（佐久間穆訳）『バルカン半島』（みすず書房、1995年）
- ・ 岡本真理「民族語の夜明け—近代東欧の言語改革」『近代のヨーロッパ探求10』（ミネルヴァ書房、2003年）
- ・ ジョルジュ・カステラン（萩原直訳）『ルーマニア史』（白水社、1993年）
- ・ 直野敦『ルーマニア語辞典』（大学書林、1984年）
- ・ 中島宗崇文「ルーマニア人の民族意識におけるローマ概念」（歴史学研究会）『幻影のローマ』（青木書店、2006年）
- ・ ベネディクト・アンダーソン（白石隆・白石さや訳）『想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』（書籍工房早山、2008年）
- ・ J・ロスチャイルド（大津留厚監訳）『大戦間期の東欧—民族国家の幻影—』（刀水書房、1994年）
- ・ P.F.シュガー、I.J.レデラー（東欧史研究会訳）『東欧のナショナリズム』（刀水書房、1981年）
- ・ Asociațiunea Transilvană pentru Literatura Română și Cultura Poporului Român“Actele privitoare la urdirea și înființarea Asociațiunii Transilvane pentru literatura română și cultura poporului romanu”(Sibiu: Tipografi'a diecesana, 1862)
- ・ Asociațiunea Transilvană pentru Literatura Română și Cultura Poporului Român”TRANSILVANIA” Anul20, 45, 60, 67~68, 70(Sibiu, 1899~1939)
- ・ Georgescu Ioan“Ce este și ce vrea să facă Asociațiunea”(Sibiu,1921)
- ・ Georgescu Ioan“Dr. Ioan Rațiu (1828-1902) 50 de ani din luptele naționale ale românilor

ardeleni”(Sibiu ,1928)

- Editura și tiparul tipografiei arhidiecezane, „Telegraful Roman” Anul 64, Nr. 85-87(Sibiu, 1916)

- Marcel Schönkron “Rumanian-English and English-Rumanian dictionary : with supplement of new words, English-Rumanian”(New York, 1952)